令和二年度和歌山県皮膚科医会医学奨励賞を頂いて

論文名

古川福実：ハンセン病をテーマとした和歌山県立医科大学の人権教育における学生レポートの解析、日本皮膚科学会雑誌　2020;130:2689-2697

2005 年から 13 年間、医学部学生の人権教育のテーマとして、ハンセン病をとりあげた。方法は入学２年目の学生を対象にしてハンセン病の一般的な講義と人権面からの講義を行い、座学授業をふまえたレポート提出の解析を行うものであった。人権面からの授業では下記について述べた。

１）歴史と現状を知る。

２）外見の変化（醜さ）と偏見差別。

３）研究者の関与に基づく非科学的で不当な隔離政策。

４）　偏見・差別を受けた人を一般社会へ迎え入れる必然性など。

そして、疾患について病気の正しい知識の習得をめざした。

　授業後のレポートは、ハンセン病のいくつかの施設に不法中絶の常態化を報じる新聞記事を紹介して、講義と新聞記事に対する感想を記してもらった。授業後のレポートは疾患の解説あるいは総説を記したものが最も多く、 中絶と患者胎児の人権の問題に言及したも

のも多くみられたが、統計的解析は困難であった。そこで、EKWORDS（テキストからキーワードを抽出するフリーソフト）をもちいて、最終年を除く 12 年間の傾向を解析すると、次のような傾向が伺えた。

１）「増加傾向にあるキーワードの数」が「減少傾向にあるキーワードの数」より多い。

２）2005 年だけ高く、その後はほぼ一定のキーワードは「胎児」「中絶」「標本」「研究」「記事」である。

３）一定傾向であるが、2011 年のみ高いのが「隔離」である。

４）減少傾向にあるが、１～２回高い年があるキーワードとして、「私たち」、「政策」、「国民」、「予防法」がある。「私たち」、「政策」、「国民」は 2011 年に高かった。「予防法」は 2009 年と 2011 年に高くなっている。

新聞報道の衝撃の強さや世相（2009 年の新型インフルエンザの世界的流行、2011 年の東日本大震災）が学生の意識に影響を与えた可能性が伺えた。

2010 年から４年間の学生については３年後の臨床実習の際に同じレポート提出を求めて傾向を比較した。２回生から５回生までの教育・学習の結果、「正しい医療に必要な研究」の重要性を認識できるようになり、「記事」を客観的に判断する段階に進んだものと思われた。

最後に、論文内容とは関係ありませんが、選択ポリクリで皮膚科に来てくれた W 君の話をいたしました。当時極めて稀ですが本州の新規ハンセン病患者を金澤先生(現在兵庫医大

皮膚科教授)がみていました。W 君も勉強し、何故隔離など今の常識から考えれば、非常識なあるいは違法なことがまかり通ったかを、2016 年の日本皮膚科学会で発表しました。そして、正しい知識を得ることの重要性を訴えていました。このことは、まさに ハンセン病の人権の講義で私が学生に訴えていたことでした。

これらのことは、和歌山県皮膚科医会会誌に発表いたします。

上出和歌山県皮膚科医会会長、医会の先生方、和歌山医大皮膚科同門会の皆様、学生課の方々、和歌山医大の学生さんに心から感謝します。